

平成 26 年度 インクルーシブ教育システム構築モデル事業 成果報告書 I
【インクルーシブ教育システム構築モデル地域（交流及び共同学習）】

法人名	学校法人 聖坂学院
指定したモデル地域名	横浜市中区

概 要

モデル地域の構成（平成 26 年 5 月 1 日現在）

モデル地域 （学校設置者）の内訳	学校数 （学校種別）
横浜市	小学校 9 校、中学校 5 校、高等学校 1 校
神奈川県	高等学校 2 校
私立	幼稚園 13 園、小学校 1 校、中学校 5 校、高等学校 5 校、 特別支援学校 2 校

【事業概要】

1. モデル地域の特色（特別支援教育に関する事項）

公立小学校の全校行事に特別支援学校小学部が参加したことから交流が始まった。当時、小学校では障害理解教育に取り組み、合同学習発表会に特別支援学校の和太鼓発表も組み入れた。その後、毎年の交流が整理されていき交流共同学習の形ができあがってきた。

教育委員会は特別支援教育に関する基本指針を発表し、積極的に共生社会に生きる児童の育成を目指して取り組んでいる。小学校でも、一人一人の教育的ニーズに応じて特別支援学級、通級指導教室など多様な学びの場での一貫した指導に取り組んでいる。

以来 20 年以上にわたる交流及び共同学習が絶えることなく続いているのは、双方の教職員が児童の成長を実感していることのみならず、保護者や地域の理解が進んできていることも大きな要因であると考えられる。

2. モデル地域への支援に関わる取組内容

小学校3年生が春にオリエンテーションを受けた後、クラスごとに特別支援学校を訪問し、リズム運動を小学部の児童と楽しんだ。秋には一日交流でクラスごとに訪問し、ペアを組んだ児童と一緒にゲームや発表など食事を共にして交流及び共同学習に取り組んだ。冬には小学部の児童が小学校を一日訪問し、3年生の児童の企画によるダンス運動やゲームなどに参加し、クラスで給食を一緒に食べ一日を過ごした。活動や発表・鑑賞などを通して築かれたお互いの交流の深まりを手紙や絵で表現して交換し、親和的な関係を築いていくことができた。小学生の感想文には一年間の児童の成長が感じられた。今年度は特別支援学級とも共同学習に取り組み、地域の指導者によるおはやし練習を続け、特別支援学級の学習発表会に参加し一緒に発表を行った。また、エイブルアート専門家の造形美術ワークショップを開き、一緒に作品作りに取り組んだ。振り返り学習の中ではタブレット型端末を使って記録画像を編集し、報告会で発表した。

タブレット型端末の使用に関する教職員の研修を行い、保護者アンケートを実施した。障害の重い児童でも、タブレット型端末の画面を操作し、反応するアイコンや画像などに興味をもつ場面が見られた。小学部の児童同士や、小学部児童と特別支援学級児童との共同学習において、記録・編集・発表などで活用できることが確認できた。

研究協議では、集団に参加できない児童への対応について、小学生の関わり方、教員の介入の見極めなどが意見交換された。また児童の成長を積極的にパンフレットに掲載し、発信していくことが確認された。

3. 成果及び課題

今年度も例年通りの交流の様子が見られたが、毎年小学校3年生の児童にとっては初めての経験であり、一回一回がどきどきするような新鮮な交流活動であった。緊張と共感が生まれ、今度会ったら名前を呼ぼうと思える交流の積み重ねが重要であったといえる。

特別支援学校と特別支援学級との共同学習で行った和太鼓のおはやし練習の中では、種類が違う太鼓でもリズムや音の強弱で互いのコミュニケーションが感じられ、お互いを意識し合い、それぞれの感性で一緒に学習することができた。

造形美術ワークショップの中では、場所を譲り合ったりお互いの線に重ねて描いたり、絵の具をかけられても我慢したり様々な共感と親和的關係が生まれた。またこれらの学習の中で、タブレット型端末を使用してお互いのコミュニケーションをスムーズにする手立てとして活用できることも確認できた。

アンケートでは、IT機器の活用について、児童の家庭での使用の様子と学校の今後の取組への期待が書かれていた。今後更に研究を継続していき、児童のコミュニケーションツールとしての有効活用を検討していくことが課題と考えている。